本から時代を読む

今月のテーマ

フェミニズム新時代
——1972年生まれの研究者たち

水島 希
東京大学情報学環交流研究員

フェミニズムやジェンダー研究といえば、バックラッシュに対抗するもの、というイメージが真っ先に浮かんでくる昨今だが、実は続々と若手研究者が新たな視点で研究を展開しつつある。特に今年は、若手ジェンダー研究者の書籍があいついで刊行されている「当たり年」だ。

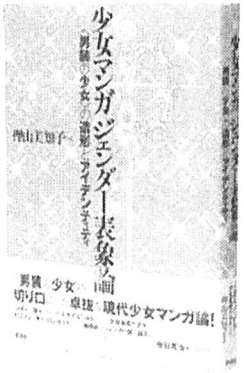
まず、明治〜大正にかけて大流行した少女雑誌から「少女」という概念を読み解く、今田絵里香『「少女」の社会史』（勁草書房）。一般的に、「少女」というイメージは、矮小化されたり気持ち悪いほど持ち上げられたりと、非当事者によって脚色されやすい印象がある。今田はこの「少女」という表象を、少女読者に焦点をあて読み解いていく。興味深いのは、少女文化を熱烈に支持していた少女たちの間に、読者欄への投稿を介した少女ネットワークが存在し、個々のライフプランの決定といった重要な側面で機能していたという点だ。ともすれば、孤立した、観念的な世界にのみ存在すると思われがちな少女世界が、リアルな実態のある関係性として見えてくる。しかしそれも戦前までの話。少女たちの強固なネットワークは、日中戦争以降、国家による言語統制や「少女」バッシングによって変質を余儀なくされ、解体してしまう。この時、少女＝センチメンタリズムという決めつけから、科学的な考えが足りない、不健全、といった文化の否定がなされ、さらには言葉遣いや作法がなっていないと少女自身も批判にさらされた。今田は、そのような時代背景の中でも、当事者の少女読者たちが外部からの介入に抗議や戸惑いを表明していることを示し、少女文化を担ってきた「少女」たちの主体性を強く示唆している。

戦後、このような少女文化圏に台頭してきたのが、少女マンガである。押山美知子『少女マンガジェンダー表象論——〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（彩流社）では、1953年に発表された少女向けストーリーマンガの第一号『リボンの騎士』から連綿とつづく〈男装の少女〉を追う。メインで扱うのは続編・リメイク版を含む『リボンの騎士』と、『ベルサイユのばら』。なぜ古い作品ばかり……？　と意外に思うが、読み進むうちに理由がわかる。50年代半ばに始まった、マンガは悪だとする「悪書追放運動」の影響をもろに受け、少女マンガ業界自体が自己規制をはじめたのだ。この時期、「少女」に対するジェンダー的な締め付けは急激に強まり、少女マンガもいやおうなく影響を受けてしまう。少女マンガ世界にぴったりな設定に思える〈男装の少女〉も、「男性を脅かさない男装」の域を超えないまま低迷してしまうのだ。一方で、70年代になると女性解放運動の影響が見られはじめ、性別の枠組みを越境する〈男装の少女〉という設定が効果的に使用される例もでてくる。本書は「表象論」ではあるが、前掲『「少女」の社会史』と同様、受け手である読者の反応を含めて議論しているのがおもしろい。

今田絵里香『「少女」の社会史』（勁草書房、07年2月、3465円）

ところで、ジェンダー研究は文化系だけで行われている訳ではない。

椎野若菜編『やもめぐらし——寡婦の文化人類学』（明石書店）は、文化人類学の視点から家族制度を再考させる論文集である。著者はケニアのルオ族においてフィールド調査を行っており、夫が亡くなった女性（寡婦）が、夫の兄弟と再婚するという制度（レヴィレート婚）に焦点をあてている。椎野は、従来の人類学は、夫と妻がいる結婚家族を社会の主流とみなし、配偶者のいない人々を捨象した形で、家族像や社会像を描こうとしてきた、と指摘しているが、これはまさに現在の日本社会が「家族」を規定する際の見方に通低している。衝撃的だったのは、著者がフィールドでお世話になっていたある家族が、レヴィレート婚の存在する社会制度によって崩壊し、さらには跡取り問題に端を発する事件から次男が殺されてしまうというエピソードだ。父性の復権や、昔の家族制度はよかった、といった言説が多々ある中、家父長制をはじめとする社会制度が、女性にとってだけでなく、男性にとっても生死の問題となるのだということを改めて思い知らされた。



押山美知子『少女マンガジェンダー表象論——〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（彩流社、07年2月、2310円）

当事者視点で見なおす女子の歴史

心理学分野の研究としては、石野陽子『母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究』（風間書房）がある。石野は、これまでの調査は、仕事を持つ母親の方が、無職の母親にくらべ、子どもに対する罪悪感が高いだろうという社会通念から、有職の母親のみが調査対象となってきたと指摘する。石野が実施した

0710_書評_本から時代を読む.indd 322-323
07.8.21 4:42:54 PM